

四 梵 住

——仏の無量心——

片 山 一 良

(駒 澤 大 学)

I

仏の教えは智慧と慈悲からなっている。それは、仏が、菩薩の時代にはいわゆる上求菩提の道に往き、法を知り、成道後にはいわゆる下化衆生の道に還り、法を説かれたということにほかならない。このように仏教では智慧と慈悲が教えの中心であり、それを支える基礎が縁起の道理であり、四聖諦であり、中道の実践である。仏の教えはすべてこの智慧と慈悲からなり、その例外はないであろう。

ここに取り上げる「四梵住」は、一般に慈悲の実践とされているが、その内容は慈悲と智慧の実践であり、見事な調和の世界を示すものである。

まず、その四梵住の教え、あるいは実践とはどのようなものかを見ることにしよう。仏教の実践としての修行は「忍耐」にあると言われる。長部 14『大譬喻経』、あるいは小部經典の『法句』につぎの言葉が知られる。

「耐え忍ぶは最上の修行 涅槃は最上、と諸仏は説く

他を害するは出家にあらず 他を悩ますは沙門にあらず」

(D. II. 49, Dh. 184)

と。これはいわゆる七仏通誡偈と呼ばれる三偈の一つであり、ヴィパッサナー（毘婆尸）仏からゴータマ（瞿曇）仏の釈尊にいたる過去七仏の、一切

の仏がだれも教えの根本としてきたものである。「忍耐」は最上の修行で
あるという。つまり耐え忍ぶことこそ仏教の最上の実践であり、それは自
他を害さない、という実践に極まる、というのである。それは、もちろん
自らの智慧に基づくものであるが、他を慈しみ、憐れむという実践である。
慈悲が、共生による人間生活の、もっとも大事な行為であることを示して
いる。

この慈悲の実践を具体的に示したものとして、たとえば小部經典の『小
誦経』、あるいは『経集』に見られる「慈経」(*Metta-sutta*)に、つぎのよ
うな言葉がある。

「あたかも母がわが独り子を	命をかけて守るように
生きとし生けるものに対して	無量の心を起こすべし、
あらゆる世界に無量なる	慈しみの心を起こすべし
上にも下にも四方にも	障害、怨恨、敵意なく、
行く、立つ、坐る、臥すときも	眠りを離れている限り
この念をよく保つべし	ここにこれを梵住 ⁽²⁾ と言う」

(*Khp. 8, Sn. 149-151*)

静かな行動のなかに、すなわち行、住、坐、臥の一切の威儀において、
親が子に対するように、生きとし生けるものに対して無量の心を起こすべ
きべきである。害意のない慈しみの心を起こし、念じるべきである、と教
えている。

また、この無量心をより明確なかたちで、慈・悲・喜・捨という四つの
解脱の心として修習すべきことを説いたものに『経集』(*Suttanipāṭa*)の
言葉がある。

「慈、悲、喜、また捨 ⁽³⁾ なる解脱を	時に応じて修しつづ
あらゆる世界に違背せず	独り行ぜよ、犀角の如く」

(Sn. 73)

慈・悲・喜・捨のそれぞれは、それぞれに敵対する法を脱しているから、解脱と言われるのである。つぎに、この慈・悲・喜・捨の実践は、具体的にどのように行なわれるのか、である。長部33『結集経』(Sangiti-sutta)には、四のそれぞれが無量の実践として、つぎのように説かれている。

「四の無量(catu-appamañña)があります。友らよ、ここに比丘は、慈しみのある心をもって(mettā-sahagatena cetasā)、一つの方向に、同じく第二の方向に、同じく第三の方向に、同じく第四の方向に満たし住みます。このようにして上に、下に、横に、一切処に、一切を自己のこととして、すべてをふくむ世界に、慈しみのある、広い、大なる、無量の、恨みのない、害意のない心をもって満たし住みます。憐れみのある心をもって(karuṇā-sahagatena cetasā)……喜びのある心をもって(muditā-sahagatena cetasā)……平静のある心をもって(upekkhā-sahagatena cetasā)……住みます」(D. III. 223-224)

比丘は、あらゆる方向に、一切の生けるもののために、一切を自己のこととして、慈・悲(=憐れみ)・喜・捨(=平静)のある、害意のない、無量の心をもって満たす者である、とし、ここにそれが「四無量」として説かれている。なお、この経そのものは、サーリプッタ長老が僧団の和合のために、また教えの久住のために、比丘たちに説き、最後に釈尊がこの説示を仏の教えとして是認されたものである。⁽⁵⁾

また、これを「四梵住」の教えとして説いたものに、増支部の『ドーナ・バラモン経』(Doṇa-brāhmaṇa-sutta, A. III. 224-225)がある。

「ドーナよ、どのようにしてバラモンは梵天に等しい者となるのか。……かれはこのように出家し、慈しみのある心をもって、一つの方向に、同じく第二の方向に、同じく第三の方向に、同じく第四の方向に

満たし住みます。このようにして、上に、下に、横に、一切処に、一切を自己のこととして、すべてをふくむ世界に、慈しみのある、広い、大なる、無量の、恨みのない、害意のない心をもって満たし住みます。……憐れみのある心をもって……喜びのある心をもって……平静のある心をもって……住みます。かれはこれら四の梵住を修習し、身体が減ぶと、死後、善道の天界に生まれかわります。

ドーナよ、このようにしてバラモンは梵天に等しい者となります」と。この内容は先のもものと異なるところがない。

以上が経典に知られる四梵住、四無量の概略である。

II

つぎに、この四梵住、すなわち慈・悲・喜・捨のそれぞれの意味を明らかにしておきたい。その資料として、『清浄道論』、『法集論註』、『経集註』、その他『パーリ語名義集復註』を用いることにする。まずは、(1)慈・悲・喜・捨の語義 (vacanattha) について (Cf. *Vism.* 317-318, *B^e. Abhidhānappadīpikā-ṭīkā*) である。つぎに、その(2)特相 (lakkhaṇa), (3)作用 (rasa 味), (4)現状 (paccupaṭṭhāna 現起), (5)足場 (padaṭṭhāna 直接因) についてである。つぎにその(6)成立 (sampatti 成功), (7)不成立 (vipatti 不成功) についてである。すなわち何がその実践 (瞑想) の成就, 不成就であるか, ということ (Cf. *Vism.* 317f., *DhsA.* 192f.) である。最後に、いわゆる(8)定義 (Cf. *SnA.* I. 128) とされるものを見ておきたい。

慈 (mettā)

(語義) ①「富ますから、慈である」(*mejhati ti mettā*)。mejhati (富ます)＝

siniyhati (潤す, 慈しむ)。②「友に対する態度 (尊敬), あるいは友への行動であるから, 慈である」(mitte bhavā, mittassa vā esā pavatti ti *mettā*)。 (特相) 利益の様相を起こすこと (hitākāra-ppavatti)。 (作用) 利益をもたらすこと (hitūpasamhāra)。 (現状) 悩害の調伏 (āghāta-vinaya)。 (足場) 諸有情の愛すべき状態を見ること (sattānaṃ manāpabhāva-dassana)。 (成立) 瞋恚の止息 (byāpāda-upasama)。 (不成立) 愛着の発生 (sineha-sambhava)。 (定義) 「一切の有情は幸福になれ」(sabbe sattā sukhitā hontu) などの仕方、利益と安楽をもたらそうと欲することである。

悲 (karuṇā)

(語義) ①「他者に苦があるとき, もろもろの善人に心の動きを作るから, 悲 (同情) である」(paradukkhe sati sādhuṇaṃ hadaya-kampanaṃ *karoti* ti *karuṇā*)。 ②「他者の苦を買い, 殺し, 滅ぼすから, 悲である」(*kiṇāti* paradukkhaṃ, hiṃsati vināseti ti *karuṇā*)。 ③「苦しむ者たちに散布され, 遍満して抔げられるから, 悲である」(*kiriyaṇi* dukkhitesu pharaṇa-vasena pasāriyaṇi ti *karuṇā*)。 ④「楽を隠す (包む) から, 悲である」(*kaṃ* sukhāṃ *rundhati* ti *karuṇā*)。 (特相) 苦の除去の様相を起こすこと (dukkhāpanayanākāra-ppavatti)。 (作用) 他者の苦に耐えないこと (paradukkhāsahana)。 (現状) 不害 (avihiṃsā)。 (足場) 苦に征服された者らの孤独状態を見ること (dukkhābhibhūtānaṃ anāthabhāva-dassana)。 (成立) 害の止息 (vihiṃsā-upasama)。 (不成立) 憂いの発生 (soka-sambhava) (定義) <「ああ, どうか, かれらがこの苦から脱しますように」(aho vata imamhā dukkhā vimucceyyuṃ) などの仕方、不利益と苦を除去しようと欲することである>。

喜 (muditā)

(語義) 「それをそなえている者たちがそれによって喜ぶ」(*modanti* tāya

taṃ-samaṅgino), 「自ら喜ぶ」(sayam modati), 「それがただ喜ぶことだけであるから、喜である」(modanamattam eva tan ti muditā)。(特相) 喜悅 (pamodana)。(作用) 無嫉妬 (anissāyana)。(現状) 不快の破壊 (arati-vighāta)。(足場) 諸有情の成功を見ること (sattānaṃ sampatti-dassana)。(成立) 不快の止息 (arati-vūpasama)。(不成立) 大笑いの発生 (pahāsa-sambhava)。(定義) 「実に尊い有情たちは喜んでいる、実によく喜んでいる」(modanti vata bhonto sattā, modanti sādhu suṭṭhu) などの仕方で、利益と安楽が離れないように欲することである。

捨 (upekkhā)

(語義) 「『怨みのない者となれ』などの営みを捨断し、中立の状態に近づき、見るから、捨である」(averā hontū ti ādivyāpārappahānena majjhatta-bhāvūpagamanena ca upekkhati ti upekkhā)。(特相) 諸有情に対して中立の様相を起こすこと (sattesu majjhattākāra-ppavatti)。(作用) 諸有情に平等を見ること (sattesu samabhāva-dassana)。(現状) 対立と執着 (怒りと貪り) の止息 (paṭighānūnaya-vūpasama)。(足場) 「諸有情は業を自己としている。かれらは誰の意欲 (好み) によって、幸福になるであろうか、あるいは苦から脱するであろうか、あるいは得ている幸福より転落しないであろうか」とこのように生起している業自性を見ること (kamma-sakā sattā, te kassa ruciyā sukhitā vā bhavissanti: dukkhato vā muccissanti, pattasampattito vā na parihāyissanti ti evaṃ pavattakammassakatā-dassana)。(成立) 対立と執着の止息 (paṭighānūnaya-vūpasama)。(不成立) 世俗的な無智の捨の発生 (gehasitāya aññāṇupekkhāya sambhava)。(定義) 「自己の業によって知られるであろう」(paññāyissanti sakena kamma) と苦楽を観察すること (ajjhūpekkhanatā) である。

以上が、四梵住のそれぞれに知られる特徴である。

III

この四梵住は無量を対象領域とする禅定をいう。そのうち、前の三梵住は憂と等起する瞋恚などを出離し、喜と相応することから四禅中（あるいは五禅中）の前三禅（前四禅）に属し、後の一梵住は捨受と相応することから四禅中（五禅中）の第四禅（第五禅）のみに属する、とされる（*Vism.* 322f.）。

また、この四梵住は、それぞれが自己のもろもろの敵対法から出離しているために「解脱」とされる。瞋恚の出離は慈心解脱、害の出離は悲心解脱、不快の出離は喜心解脱、貪の出離は捨心解脱である、と呼ばれている（長部33『結集経』第31節 *D. III. 248-249*）。また、相応部の『慈俱行経』（*Mettāsahagata-sutta=Haliddavasana-sutta*）によれば、この四解脱について、慈は浄（subha）を終結（parama=終辺 koṭika=完成 nipphatti, *SA. III. 172*）とし、悲は空無辺処（ākāsānañcāyatana）を終結とし、喜は識無辺処（viññāṇañcāyatana）を終結とし、捨は無所有処（ākāraṇa⁽⁶⁾ñcāyatana）を終結とすると言われる。

以上の四梵住を個別的に、人を主にまとめれば、つぎのようになる。

四 梵 住

慈：（瞋恚の出離）	一切の人	慈しむ	慈心解脱	浄	} 第一～三禅 （喜受）
悲：（害の出離）	苦しむ人	憐れむ	悲心解脱	空無辺処	
喜：（不快の出離）	喜ぶ人	喜ぶ	喜心解脱	識無辺処	
捨：（貪の出離）	業自性	観る	捨心解脱	無所有処	第四禅（捨受）

このように四梵住は、瞋恚の出離などのように、それぞれ各別の目的をもつが、また、共通の目的がある。それはつぎのように言われている。

「観の楽（vipassanā-sukha）と有の成就（bhava-sampatti）である」

(*Vism.* 318, *DhsA.* 193)

と。それは「現法楽住」(*diṭṭhadhamma-sukha-vihāra*)であるとされる(*B^e. Vism-MT. I.* 380)。四梵住は現法楽住を共通の目的とし、まとまったものである。

四梵住はこのように共通の目的と各別の目的をもっているが、また別に、相互の関係をもつものである。すなわち、四のうち、慈・悲・喜という前の三梵住は、捨という後の一梵住と性質を異にするものである。どのように異なるかと言えば、人(人間)を主とする場合、まず、慈・悲・喜は人と人の関係、あるいは「人間の情」の世界の事柄であり、捨は人と法の関係、あるいは「自然の理」の世界の事柄である、ということである。また、前者は相対、事、差別、苦楽の事柄であるのに対して、後者は絶対、理、無差別、中の事柄である。つまり、前者は慈悲の側にあるもの、後者は智慧の側にあるもの、といってよいであろう。

たとえば、すべての人々の幸福を願う、あるいは苦しむ者の苦が消えることを願う、あるいは喜んでゐる者の喜びの増大を願う場合、親が子に願うように、過度になることがあるかもしれない。その場合、望ましい結果は期待されないであろう。それは自然の道理によって説明されるよりほかはない。捨(平静)による、無貪による、業自性の見方による解決がなされることになるであろう。業自性の見方とは、生けるものはすべて業を自己とする、業、心、意思を等しく有するものである、との見方である。智慧によって見るのである。世間の正見をいう。だれもこの自然の見方に戻るより道はない。この慈・悲・喜・捨という四梵住の相互の関係について、『清浄道論』はつぎのように説明している。

「この四梵住の前三梵住の等流(*nissanda* 結果)は捨梵住である」

(*Vism.* 320)

と。これは慈・悲・喜が捨に帰入し、収まる、ということである。慈の静まり、悲の静まり、喜の静まりは捨となる。だれも等しく業があり、等しく生きていると知らねばならない。これによって、自己は静まり、世界は調和が保たれる。

また、後代の『大智度論』にはつぎのような説明がある。

「大智慧を捨相遠離相と名け、大慈大悲を憐愍利益相と為す。……諸仏はよく衆生想を離れて而も慈悲を生じたまふ」

（『大智度論』初品第四十二）

と。これは、大なる智慧と大なる慈悲に言及するものであるが、ここには捨を大智慧とし、慈・悲・喜を大慈大悲とすることが説かれている。つまり、四梵住の慈・悲・喜は慈悲を、捨は智慧を根本とする、ということにほかならない。すでに見たように、捨は「近くに見る、よく観る」(upek-khati)を原意とするものである。

ここで四梵住における相互の関係を、人を主にまとめれば、以下のようになるであろう。

調和の世界

慈悲喜：（慈悲） 人と人 相対 事 差別 苦楽 （人間の情）

捨 ：（智慧） 法と人 絶対 理 無差別 中 （自然の理）

IV

つぎに、四の勝れた梵天の住まい、無量の利他心である四梵住と、十の完全な菩薩行である十波羅蜜との関係を見ておきたい。「捨梵住」と「捨波羅蜜」との関係はどうか、である。⁽⁷⁾『清浄道論』(Vism. 325)はつぎのように述べている。

「四梵住はすべて施（波羅蜜）などの一切の善法（波羅蜜）を満たすものと知るべきである。すなわち、（慈により）諸有情の利益を決意することによって、（悲により）諸有情の苦に堪えないことによって、（喜により）有情の得ているすぐれた幸福の永続を欲することによって、（捨により）一切の有情に対して偏頗のないことによって、平等に心を起こす大士（菩薩）たちは、①（布施波羅蜜）「この者に施すべきである」「この者に施すべきでない」という区別をせず、一切の有情に樂の因である布施を行なう。②（持戒波羅蜜）かれらへの危害を回避し、戒を保つ。③（出離波羅蜜）戒を満たすために出家（離欲）をする。④（智慧波羅蜜）諸有情の利益・不利益に迷わないために慧を浄化する。⑤（精進波羅蜜）諸有情の利益と安樂のためにつねに精進に努め、また最上の精進によって勇猛となる。⑥（忍辱波羅蜜）諸有情の種々の違背を忍耐する。⑦（真実波羅蜜）「これをあなた方のために与えよう、行なおう」と約束したことを破らない。⑧（決意波羅蜜）かれらを利益し、安樂にしようとの不動の決意をする。⑨（慈波羅蜜）かれらに対して不動の慈により恩恵を施す。⑩（捨波羅蜜）捨によって報酬を望まない。このように（菩薩たちは）波羅蜜を完成し、十力・四無畏・六不共智・十八仏法の一切善法をも満たす。以上のように、これら（四梵住）こそ、このように施などの一切の善法を満たすものである」

と。このうち、とくに捨梵住と捨波羅蜜とについて言えば、捨梵住（upekkhā-vihāra）そのものは一般的な世間の利益行に向かわないが、捨波羅蜜（upekkhā-pāramī）は世間の利益行に向かうものである、と言うことができる。⁽⁸⁾

ここで、四梵住の「四」「梵住」、四無量の「無量」の意味に触れておき

たい。

『清浄道論』⁽⁹⁾によれば、まず「四」は、たとえば母が四人の子に対するようなものであり、過不足があってはならないものであるという。「慈」は幼児(dahara)に利益を齎すようなもの、「悲」は病者(gilāna)の不利を除くようなもの、「喜」は青年になった者(yobbana-ppatta)の幸福を喜ぶようなもの、「捨」は自活者(sakicca-pasuta)に無関心となるようなものである、と。

つぎに、「梵住」については、「梵天の住まいのように無過失のもの、正しい行道ゆえに最勝のものであるから、梵住(brahmavihāra)である」と言われる。勝れた梵天の住まい、ということである。それでは、梵天とは何か。増支部の『梵天共住経』(Sabrahma-sutta, A. I. 132)につぎのように説かれている。

「比丘たちよ、梵天のいるもろもろの家系があります。その家では子らによって母父が敬われます。比丘たちよ、先師のいるもろもろの家系があります。その家では子らによって母父が敬われます。比丘たちよ、供養される者のいるもろもろの家系があります。その家では子らによって母父が敬われます。比丘たちよ、梵天とは、これは母父の同義語です。比丘たちよ、先師とは、これは母父の同義語です。比丘たちよ、供養される者とは、これは母父の同義語です」

と。これによって、梵天とは母父、つまり両親であること、また先師、供養される者であることが知られる。それは最勝者をいうものである。最勝の大梵天には慈・悲・喜・捨という四の修習が放棄されないように、母父にも子に対して四の修習が放棄⁽¹⁰⁾されることがないからである。たとえば、子が胎児のときには、「いつ整った手足が見られるのだろう」と慈心が起こる。赤子のときには、虫にかまれて泣く声を聞いて、悲心が起こる。走

り回り、遊ぶときには、その姿を眺めて、喜心が起こる。妻を迎え、独立して家に住むときには、もう大丈夫、と中庸の捨心が起こるのである。だれも四梵住により、父母となり、梵天となる、ということであろう。

つぎに、「無量」については、「それは無量 (appamāṇa, appamañña) の領域に対して起こるからである」と言われている。それは無量の有情、生きとし生けるものを所縁とする、ということである。それはまた、四梵住、あるいは四無量 (心) が、どこまでも世間のものであり、出世間のものではない、ということを示している。このことは、つぎの説明によっても確認される。

「なお、これらの四梵住はもろもろの輪転 (vaṭṭa) 《業輪転 (kamma-vaṭṭa)》になる。輪転の基礎 (vaṭṭa-pāda) 《異熟輪転の根拠 (vipāka-vaṭṭa-kāraṇa)》となる。観の基礎 (vipassanā-pāda) となる。現法楽住 (ditṭhadhamma-sukhavihāra) となる。通智の基礎 (abhiññā-pāda)、あるいは滅尽の基礎 (nirodha-pāda) となる。しかし出世間のもの (lokuttara) とならない。なぜか。有情 (satta) を所縁 (ārammaṇa) とするからである」(AA. II. 41, B^e.AA. I. 382; AṬ. I. 234)

と。

以上のように、四梵住、四無量心は勝れた禅定の実践であり、他者の幸福を願う最上の教えである。それはまた、人間 (有情) の世界において調和を保つための生活法であり、仏の智慧と慈悲に基づく完全な教えであるといってよいであろう。慈・悲・喜によって無量の慈悲を示し、捨によって智慧を説くものである。この実践は時や場所を選ばない。いつでも、どこでも、だれでも、ただちに可能なものである。

註

- (1) 拙稿「原始仏教における善悪—『法句』第183偈の意味するもの—」『日本仏教学会年報』第65号参照。
- (2) 〈四の天住・梵住・聖住・威儀路住のうち、欠点がないものであるから、また自己にも他者にも利益になるものであるから、これを、ここ、聖なる法と律において、梵住 (brahma-vihāra) という。最勝の住 (seṭṭha-vihāra) という〉(KhdA. 250-251)。
- (3) 従来の諸和訳は「解脱」を第五とするが、そのようには解されないであろう。四梵住なる解脱、という意味である。なお、「あらゆる世界に違背せず」とは、十方における一切の有情世界に違背せず、ということである。すなわち、慈などが修習されているために、諸有情は逆らうことがなく、また、諸有情に対して違背となる対立(怒り)は静まるのである。
- (4) 「一切を自己のこととして」(sabbattatāya) の意。R^e は sabbatthatāya とする。
- (5) 拙訳『長部(ディーガニカーヤ) パーティカ篇(II)』『結集経』第53~54節参照。
- (6) 四解脱について、『清浄道論』はつぎのように説明する。慈(慈しみ)に住む者 (mettā-vihāri) には、有情は好ましいものである。かれは、有情の好ましいものに習熟するから、有情に好ましい青などの遍浄色に対して、その心は專注し、容易に跳入する。このように「慈」は、浄解脱 (subhāvimokkha) の強い因であり、それ以上のものにならないから、浄を終結とする。また、悲(憐れみ)に住む者 (karuṇā-vihāri) は、色相のある有情の苦を随観し、色の危難をよく知悉するから、地遍などのいずれかを去り、色より出離する虚空に、その心は專注し、容易に跳入する。このように「悲」は空無辺処の強い因であり、それ以上のものにならないから、空無辺処を終結とする。また、喜(喜び)に住む者 (muditā-vihāri) は、喜びが生じている有情の識を随観し、喜が生起するから、その心は識の把握に習熟する。そこで、空無辺処を超え、虚空相を対象領域とする識に、その心は專注し、容易に識に跳入する。このように「喜」は識無辺処の強い因であり、それ以上のものにならないから、識無辺処を終結とする。そして捨(平静)に住む者 (upekkhā-vihāri) は、「有情は幸福となれ」「苦から脱するように」「得られた幸福から転落しないように」との思いがないから、また、苦楽などを第一義として把握することから離れているから、その心は第一義的には存在しないものを把握することに苦しむ。なぜなら、捨の修習は慈などの場合と異なり、ただ平静に見る観察のみによって有情を所縁とするからで

ある。そこで、その心は次第に得られた識無辺処を超え、第一義のものとしての識の無に、すなわち自性上に存在しないものに専注し、容易に識の無に跳入する。このように「捨」は無所有処の強い因であり、それ以上のものにならないから、無所有処を終結とする、と。Cf. *Vism.* 324, *B^e. Visuddhi-magga-mahāṭikā* I. 388-390, *S. V.* 119f. 長部15『大因縁経』第35節、長部24『パーティカ経』第47節参照。

- (7) 『大義釈註』(*MNidA.* 137-138)によれば、捨 (*upekkhā*) には十種があるとされる。すなわち、①六支捨 (*chaḷaṅga-upekkhā*)。眼などの六門において色などの六所縁に執着しないこと。②梵住捨 (*brahmavihāra-upekkhā*)。捨梵住の捨。諸有情に対して、中立の様相 (*majjhataṅkāra*) となる捨。③覺支捨 (*bojjhaṅga-upekkhā*)。捨覺支の捨。俱生法の中立の様相となる捨。④精進捨 (*virīya-upekkhā*)。不急不緩の精進。精勤に過ぎず、緩過ぎない精進と称される捨。⑤行捨 (*saṅkhāra-upekkhā*)。五蓋などの省察、観察、把握の中立となる捨。⑥受捨 (*vedanā-upekkhā*) 非苦非楽の受。⑦観捨 (*vipassanā-upekkhā*)。中立なる観察。⑧中捨 (*tatramajjhatta-upekkhā*)。心所としての捨。そこにおける中立、中正。⑨禅捨 (*jhāna-upekkhā*)。第三禅中に得られる捨。⑩遍淨捨 (*pārisuddhi-upekkhā*) 第四禅中に得られる捨、である。なお、ここには「捨」の語義が、「生起より (*uppatṭito*) 観る (*ikkhati*) から捨 (*upekkhā* 観生起) である」とされ、「等しく見る (*samaṃ passati*)、偏頗なく見る (*apakkhapatitā va hutvā passati*)」という意味に解されている。水野弘元『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』(山喜房仏書林) 630頁以下参照。
- (8) Cf. U Shwe Aung: *The Buddha, peerless benefactor of humanity* (*Myanmar*, 1995), p. 291f. ちなみに四阿僧祇十万劫の昔、スメーダ菩薩は捨波羅蜜をこう決意したという。「たとえば大地というものは、清浄であれ不浄であれ、投棄された両者を等しく、対立、愛着を回避し、観る。そのようにお前も苦楽に対し、つねに秤のようになれ、捨波羅蜜に到るならば 正しい覺りを得るであろう」(*Bv. vv.* 163-164) と。
- (9) *Vism.* 320-321.
- (10) *AA.* II.204